

よめじよ川工事伝説

垂水市井川に「疎水壘田之碑」と刻まれた石碑があります。昔の水路工事のことを後世に伝えたいと、垂水史談会によって昭和七年に建てられたものです。

およそ三百年ほど昔、垂水では当時の殿様が大変なけちんぼほうであるという噂が流れていました。具体的に何をどうしたという話はないのですが、とにかくお金を出し渋り、入ってきたお金は一文二文であつてもすぐに蔵に収めるというのです。その噂は鹿児島城下にも広まっていき、家来たちは幾度となくきまり悪い思いをしました。

そこで、ある者が恐る恐る、「お殿様のことを世間ではこげん申し上げておりますが」と言いました。けれども、殿様は、「そうであるか」と言われただけで、全く気にもされない様子でした。そうして、相変わらず、せつせとお金を貯めておられました。ある日、金蔵の役人が、「殿様、金蔵の扉が閉まりません。金が一杯であふるつ程になつしても、かんぬきがかかりません」と言ってきました。すると、殿



様は、なんのためらいもなく、「そうか。それでは金を出すことにしよう」と言われました。そして、すぐに工事奉行を呼び、蔵のお金をもとにしてよめじよ川の疎水工事をするようにと命ぜられたそうです。

この話は口伝えのものですから、事実はどうであつたか分かりませんが、蔵ひとつでは到底賄えないほどの費用がかつたであろうと推測されます。ちなみに、工事は約一里(7.9 km)の水路を造るといふ大規模なもので、完成したのは五十年の時を経て、この殿様の二代後であつたということです。

なお、よめじよ川という名前の由来は、この川の水底が非常に清らかで美しく、あたかも嫁女のようなであつた、また、本城川の水を分けて注ぎ込むので嫁に行くようだからなどと言われています。

(原話「垂水市史 上巻」)
文／有馬英子 絵／二石綱夫